

## 峰 研治 氏 学位審査結果の要旨

主査：湊 直樹

副査：中邨 智之、塩島 一朗

未熟児の症候性動脈管開存症(PDA)における「治療の必要性」を判断するためのバイオマーカーとして、血中 BNP 値が有用かどうかを評価した研究である。[方法]未熟児 PDA の症候群と非症候群において、生後 5 日間にわたり血中 BNP 値を測定した。[結果]症候群の血中 BNP 値は非症候群に比べ生後 1-3 日で有意に高く、症候群ではインドメタシン治療を受けていた。インドメタシン治療を予測する値として BNP 値 250pg/ml が得られ、インドメタシン治療率は 66.7% であった。一方、外科的動脈管結紮術を必要とする予測値としては生後 5 日以内の血中 BNP の最高値 2000pg/ml 以上が得られ、外科的結紮術施行率は 66.7% であった。[結論]生後 1-3 日齢の血中 BNP250pg/ml と生後 5 日以内の BNP 値 2000pg/ml は、それぞれインドメタシン治療と外科的結紮術治療の必要性を示すため、血中 BNP 値は未熟児症候性 PDA の治療の必要性を評価するためのバイオマーカーとなりうる。